

訂正箇所	誤	正
<p>図面番号 3</p> <p>足場用吊金具取付位置 図</p>	<p>足場用吊金具取付位置図 S=1/20</p>	<p>足場用吊金具取付位置図 S=1/20</p>
<p>図面番号 14</p> <p>足場用吊金具取付位置 図</p>	<p>足場用吊金具取付位置図</p>	<p>足場用吊金具取付位置図</p>

ガイドライン型設計 適用上の考え方と標準図集(改訂版)

「3 主要ポイントの計算例 (4)連結部付近の短い水平補剛材の省略について」の修正

「(4)連結部付近の短い水平補剛材の省略について」において、ページ中段に示される水平補剛材を省略できる範囲を示すグラフに間違いがありましたので、訂正いたします。

訂正の内容は破線で示される SM490 材の幅厚比／アスペクト比 α の図で、 $\alpha = 0.35$ で線分が水平から右下がりとなる図となっていました。添付資料は、 $\alpha = 0.4$ で右下がりの図となるのが正解です。添付資料は、グラフを正規のものに差替ページ(21 ページ)を示します。

平成 19 年 5 月

(社)日本橋梁建設協会 構造技術部会

(4) 連結部材付近の短い水平補剛材の省略について

上記の水平補剛材の要否は設計上でいつも悩まされる点で、コストと施工性の両方の観点から要否判定基準が求められていた。

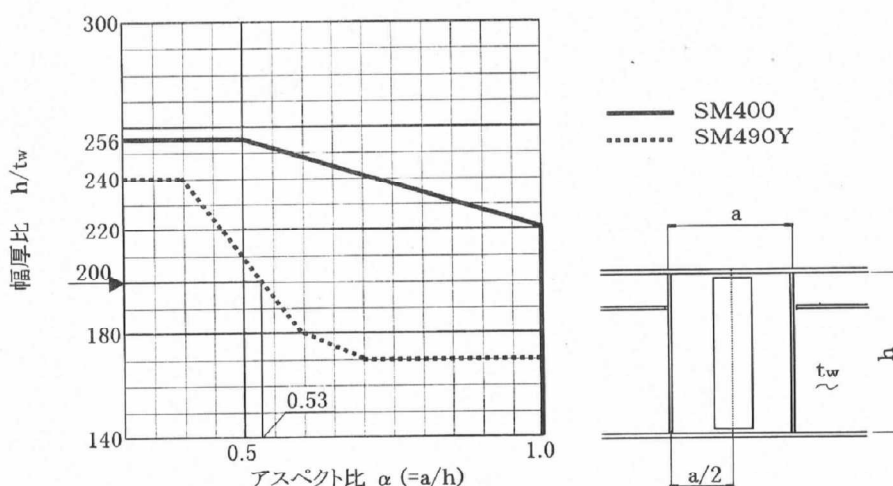
日本橋梁建設協会では、平成5年に大阪大学西村教授にこの件に関する研究を委託し、下図に示す結果を下記の文献などに公表している。

秋山寿行、西村宣男、亀井義典、大松省吾

『鋼I桁の高力ボルト継手部腹板の補剛構造の合理化に関する実験』

鋼構造年次論文報告集 第2巻(1994年12月)

この文献に基づき本冊子における連結部近傍の水平補剛材の要否を判定すると、腹板厚が従来よりも大きいこともあって、ほとんどの場合連結部近傍の水平補剛材を省略できる結果が得られた。



【照査例】

腹板の幅厚比 (h/t_w) から限界アスペクト比 (α') を求め、腹板アスペクト比 (a/h) がそれ以下であれば省略が可能となる。

(例題)

$a=1200\text{mm}$ $h=2400$ $t_w=12\text{mm}$ (SM490Y)

幅厚比 $h/t_w = 2400 / 12 = 200$ より

限界アスペクト比 $\alpha' = 0.53$

アスペクト比 (a/h) $= 1200 / 2400 = 0.50 < \alpha'$

よって、水平補剛材は省略可

・本書の標準図集で示す桁で、水平補剛材が省略できる垂直補剛材間隔は以下のとおりとなる。

	$=a/h$	0.53 より	a	$0.53 \times h$
鋸桁主桁	a	$0.53 \times 2400 = 1272\text{mm}$	$a/2 = 636\text{mm}$	
箱桁主桁	a	$0.53 \times 3000 = 1590\text{mm}$	$a/2 = 795\text{mm}$	
箱桁横桁	a	$0.51 \times 2300 = 1173\text{mm}$	$a/2 = 586\text{mm}$	